

## 小学校家庭科の指導内容からみた教師のタイプについて

五 島 淑 子\*

### Types of Home Economics Teachers at Elementary School Viewed from Their Concerns toward Teaching

Yoshiko Goto\*

The purpose of this study is to make clear the types of home economics teachers according to their typical concerns of instruction. A questionnaire was given to 152 home economics teachers at elementary schools in Yamaguchi Prefecture in 1984.

The results of factor analysis as to what aspect these teachers emphasize home economics showed that they economics teachers are divided into five types : those attaching importance to 'manners', 'dwelling', 'skills training', 'home management' and 'scientific theory'.

This study implies the necessity of designing teaching materials suitable for teachers of each type.

#### はじめに

筆者は、これまで、現場教師が児童の生活をどのように把握しているか、および現場教師の家庭科観について、山口県の小学校教師を対象におこなったアンケートをもとに報告した<sup>1)2)</sup>。本報では、これらにひきつづき家庭科を担当している教師を対象とした、家庭科の授業内容についての質問をもとに、家庭科担当教師の特徴的な像をあきらかにしようとするものである。

家庭科の指導実態については、男女別、意識別、年齢別、地域別に比較した報告<sup>3)4)</sup>等がされている。

小学校において教師は原則として全教科を担当することになっている。なかでも家庭科は家庭生活を学習の対象とするため、個人の生活経験、性別、家庭ならびに家庭科への興味・関心の程度、うけてきた家庭科の学習経験等により、家庭科観が異なり、授業内容もかわってることが予想される。

しかしながら、家庭科を指導する小学校教師の全体像は、まだ、十分にあきらかにされていないようである。そこで、家庭科の指導内容(教材評価)を通して、家庭科の教師像をあきらかにしようとした。

#### 調査方法

調査方法は、前報<sup>1)</sup>で報告したとおりであるが、本報では、山口県全域の小学校教師のうち、家庭科を担当している152名を対象とした。内訳は、男52名、女100名で家庭科の専科教師11名を含んでいる。調査時期は、1984年2月から3月まで、調査方法は、質問紙郵送法によった。集計も、前報同様、山口大学情報処理センター山口分室にて九州大学大型計算機センターのSPSS統計パッケージをもちいておこなった。

#### 結果および考察

##### 1. 重点をおいている指導内容

主に昭和52年版指導要領から家庭科の指導内容13項目を選び、それぞれの項目について、「重点をおいていますか」の質問に、「重点をおいている、ふつう、あまりおいていない」という3段階の回答とした。

領域は、現在の指導要領では、被服、食物、住居と家族の3領域であるが、ここでは、住居と家族を分けて4領域で考えることにする。質問項目は、図1に示すように、①から③が被服、④から⑦が食物、⑧から⑩が住居、⑪から⑬が家族となっている。⑦「今日の加工食品の問題」は教科書にはあまりとりあげられていない内容であるが、今日的な問題であり、質問項目に加えた。

\* 山口大学教育学部

Faculty of Education, Yamaguchi University

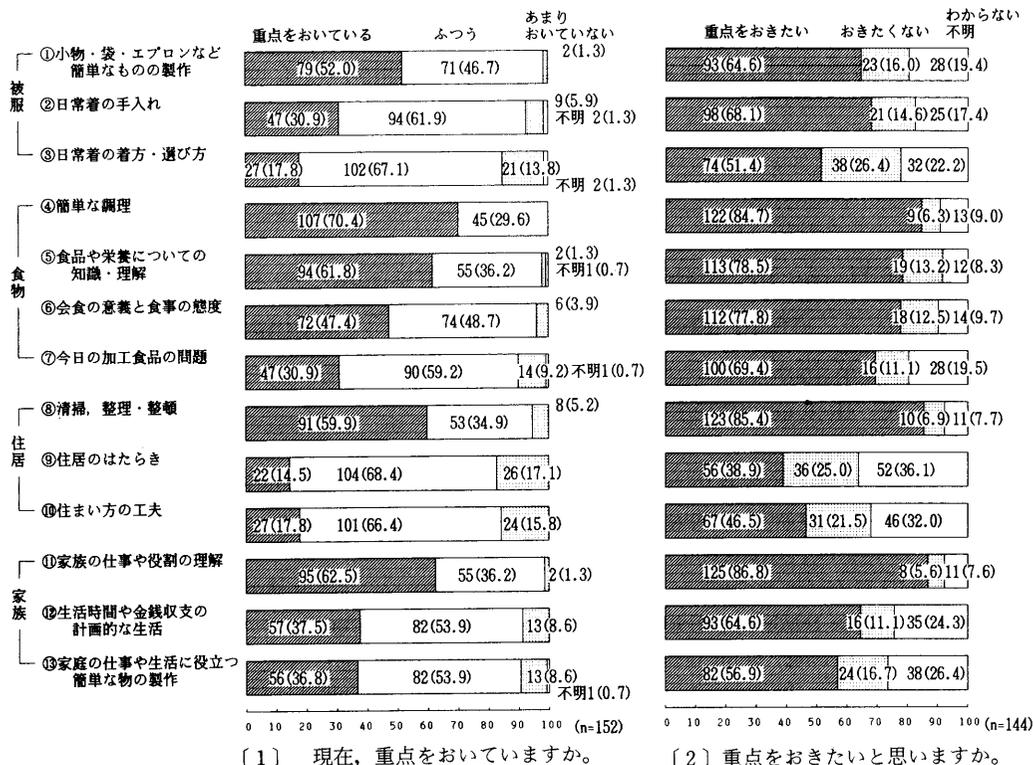


図1 家庭科の指導内容について

表1 現在、重点をおいていますか (n=152)

重点をおいている (上位5位)	人数 (%)
1. 簡単な調理	107 (70.4)
2. 家族の仕事や役割の理解	95 (62.5)
3. 食品や栄養についての知識・理解	94 (61.8)
4. 清掃、整理・整頓	91 (59.9)
5. 小物・袋・エプロンなど簡単なものの製作	79 (52.0)
重点をあまりおいていない (上位5位)	人数 (%)
1. 住居のはたらき	26 (17.1)
2. 住まい方の工夫	24 (15.8)
3. 日常着の着方・選び方	21 (13.8)
4. 今日の加工食品の問題	14 (9.2)
5. 生活時間や金銭収支の計画的な生活	13 (8.6)
6. 家庭の仕事や生活に役立つ簡単な物の製作	13 (8.6)

結果を図1の〔1〕に示した。「現在、重点をおいている」「あまりおいていない」のそれぞれ上位5位までを表1にまとめた。「重点をおいている」のは、「簡単な調理」が第1位、「家族の仕事や役割の理解」が第2位、「食品や栄養についての知識・理解」が第3位である。「あまり重点をおいていない」のは、「住居のはたらき」、「住まい方の工夫」、「日常着の着方・選び方」である。

図1の〔1〕に示すように、被服領域では「小物・袋・エプロンなど簡単なものの製作」、食物領域では「簡単な調理」、住居領域では「清掃・整理・整頓」、家族領域では「家族の仕事や役割の理解」というようにそれぞれの領域ごとにとくに重点をおいている内容のあることがかなり明らかに認められた。

2. 重点をおきたい指導内容

次に、限られた時間数で、教科書を使用して指導するなどの現実において、自分としては大事だと思うが実際には十分できない、またはその逆もあることが考えられる。そこで、「できるならば」あるいは「期待」的な考え方をきく意味で各項目について「重点をおきたいと思いますか」という質問をし、その結果を図1の〔2〕に示した。図1の〔1〕とくらべて、まず、すべての項目で「現在、重点をおいている」項目と「重点をおきたい」項目では、内容的に多少の差があり、両者で共通の項目については「重点をおきたい」という回答の方が支持率は高かった。

領域別にみると、被服領域では、「日常着の着方・選び方」は「現在、重点をおいていない」し、また「重点をおきたくない」とも思っている。「小物・袋・エプロンな

表2 重点をおきたいと思いますか。(n=144)

重点をおきたい (上位5位)	人数(%)
1. 家族の仕事や役割の理解	125(86.8)
2. 清掃、整理・整頓	123(85.4)
3. 簡単な調理	122(84.7)
4. 食品や栄養についての知識・理解	113(78.5)
5. 会食の意義と食事の態度	112(77.8)
重点をおきたくない (上位5位)	人数(%)
1. 日常着の着方・選び方	38(26.4)
2. 住居のはたらき	36(25.0)
3. 住まい方の工夫	31(21.5)
4. 家庭の仕事や生活に役立つ簡単な物の製作	24(16.7)
5. 小物・袋・エプロンなど簡単なものの製作	23(16.0)

ど簡単なものの製作」すなわち「被服の製作」は「現在、重点をおいている」で第5位に入るとともに「重点をおきたくない」にも第5位にあるという興味深い状況がみられる。

食物領域では、表1と表2の間で大きな矛盾は認められず、全体的に積極的とりくみ意向のあることがうかがわれた。

住居領域では「清掃、整理・整頓」が、「現在」も「重点をおいている」が「期待」も大きいことが示されている。しかし、それ以外の項目については、「現在」も「期待」としても「重点」的にはとりあげていない人が多く、さらに「わからない」と答えた人が30%強あった。これは、住宅現実が多様であり、プライバシーにかかわることもある、また教室で実験的に行うことも容易でない、教師自身が住居学を体系的に学ぶ機会が少なかったなどの結果かと考えられる。

家族領域では、「家族の仕事や役割の理解」が「現在、重点をおいている」も「重点をおきたい」もともに上位である。なお、「家族の仕事や生活に役立つ簡単な物の製作」については、「重点」との考え方は強くない。

### 3. 指導内容にかかわる条件

次に、これらの項目がどういう条件とかわりをもっているかを調べるために $\chi^2$ 検定を行い、その結果が表3である。有意差1%危険率のものを\*\*、有意差5%危険率のものを\*で示している。

男女別では、「日常着の手入れ」、「日常着の着方・選び方」、「食品や栄養についての知識・理解」の項目で、女性のほうが「重点をおきたい」と考えている割合が高かった。

年代的には「住まい方の工夫」で20代は4人に1人が「重点をおいていない」と答えているが、30代では「重点をおいている」割合が高かった。「会食の意義と食事の態

表3 家庭科の内容と家庭科観との関連

	男 女	年 令	地 域	家 庭 科 観					
				日 常 生 活 の 礼 儀	日 常 生 活 の 規 律	知 識 ・ 技 能	男 女 平 等	消 費 者 教 育	科 学 の 認 識
現在 重点をお いていま すか	①被服の製作								
	②日常着の手入れ								
	③着方・選び方								
	④簡単な調理								
	⑤食品や栄養								
	⑥会食の意義								
	⑦加工食品の問題								
	⑧清掃、整理・整頓								
	⑨住居のはたらき								
	⑩住まい方の工夫								
重点をお きたいと 思いま すか	⑪家族の仕事や役割								
	⑫計画的な生活								
	⑬物づくり								
	①被服の製作								
	②日常着の手入れ								
	③着方・選び方								
	④簡単な調理								
	⑤食品や栄養								
	⑥会食の意義								
	⑦加工食品の問題								
⑧清掃、整理・整頓									
⑨住居のはたらき									
⑩住まい方の工夫									
⑪家族の仕事や役割									
⑫計画的な生活									
⑬物づくり									

( $\chi^2$  検定 \*\* 1% \* 5%の危険率で有意差あり)

度」は、30代で「重点をおきたくない」、および「わからない」と答えた割合が、他の年代にくらべて大きかった。「家庭の仕事や生活に役立つ簡単な物の製作」は、年齢があがるにつれ「重点視しない」傾向がみられた。

地域的には市街地・農村・山漁村の3類型で比較した。市街地で「住居のはたらき」に重点のおかれていることが認められた。

「家庭科観」はアンケートの中で「家庭科の学習で子どもにつけたい能力」についての回答のなかから、特徴的な6つの項目<sup>2)</sup>について検定を行った。その結果、「日常生活の礼儀を重要」と考えるものは、「現在」と「期待」それぞれにおいて「会食の意義と食事の態度」を重点視し、「清掃、整理・整頓」は「現在重点」、「日常着の着方・

表4 家庭科の内容についての重点のおきかたに関する相関係数

	被服の製作	日常着の手入れ	着方・選び方	簡単な調理	食品や栄養	会食の意義	加工食品	整理・整頓	住居のはたらき	住まい方の工夫	家族の仕事や役割	計画的な生活	物づくり
①被服の製作	1.000												
②日常着の手入れ	0.170	1.000											
③着方・選び方	0.022	0.417	1.000										
④簡単な調理	0.385	0.130	-0.060	1.000									
⑤食品や栄養	-0.079	0.183	0.289	0.129	1.000								
⑥会食の意義	0.128	0.217	0.409	-0.051	0.107	1.000							
⑦加工食品の問題	-0.093	0.088	0.273	0.125	0.323	0.108	1.000						
⑧清掃、整理・整頓	-0.067	0.128	0.197	-0.090	0.168	0.320	0.093	1.000					
⑨住居のはたらき	0.115	0.236	0.192	0.075	0.126	0.141	0.139	0.264	1.000				
⑩住まい方の工夫	0.188	0.171	0.241	0.100	0.117	0.157	0.142	0.222	0.609	1.000			
⑪家族の仕事や役割	0.023	0.148	0.195	0.147	0.058	0.134	0.090	0.325	0.199	0.162	1.000		
⑫計画的な生活	-0.006	0.227	0.400	-0.019	0.124	0.276	0.304	0.313	0.260	0.270	0.289	1.000	
⑬物づくり	0.229	0.074	0.202	0.190	0.127	0.172	0.123	0.086	0.178	0.211	0.116	0.172	1.000

選び方」「食品や栄養についての知識・理解」「家族の仕事や役割の理解」には「期待重点」と考えているなど、表3に示す傾向がみられた。

4. 重点をおいている項目の相関

表4は、「現在、重点をおいていますか」の設問項目間における相関係数を示したものである。「住居のはたらき」と「住まい方の工夫」の相関が最も高く(+0.609)、その他+0.4以上の相関を示したものは「日常着の着方・選び方」と「日常着の手入れ」(+0.417)、「会食の意義と食事の態度」と「日常着の着方・選び方」(+0.409)、「生活時間や金銭収支の計画的な生活」と「日常着の着方・選び方」(+0.400)であった。

5. 因子分析による小学校教師のタイプ

相関係数をみただけでは、重点をおく、おかないという教師の判断にどのような法則性があるのかは明らかでないので、家庭科の内容を選択する要因となるであろう因子をとらえるために、因子分析を行った(ケース数144)。その結果、5つの共通因子を抽出した。表5は各因子についてそれぞれの因子を特徴づける因子負荷量が大きい項目ほど上に配置されるようにならべかえたものである。因子分析の結果は、小学校教師が家庭科を担当するときの家庭科の内容の重点のおき方が5つの因子にわかれること、すなわち、家庭科を指導するさい、重点をおく内容によって、小学校教師が5つの典型的なタイプにわかれることをしめしている。

図2は第1因子を横軸、第2因子を縦軸に、図3は第1因子を横軸、第3因子を縦軸にあらわしたものである。抽出された各因子についてみると次のようになる。

第1因子は、「日常着の着方・選び方」、「会食の意義と

表5 家庭科の内容についての重点のおきかたに関する因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
因子の寄与率→	(46.7%)	(20.6%)	(14.0%)	(10.2%)	(8.5%)	
日常着の着方・選び方	0.801	0.099	-0.050	0.090	0.333	0.773
会食の意義と食事の態度	0.483	0.056	0.025	0.298	-0.001	0.325
日常着の手入れ	0.409	0.137	0.163	0.091	0.125	0.237
住まい方の工夫	0.153	0.746	0.121	0.131	0.081	0.618
住居のはたらき	0.100	0.739	0.073	0.200	0.099	0.610
簡単な調理	-0.130	0.006	0.765	0.016	0.226	0.654
被服の製作	0.207	0.139	0.634	-0.063	-0.281	0.547
物づくり	0.193	0.159	0.263	0.099	0.100	0.152
清掃、整理・整頓	0.150	0.155	-0.110	0.675	0.049	0.517
家族の仕事や役割の理解	0.100	0.098	0.123	0.452	0.104	0.249
計画的な生活	0.332	0.196	-0.023	0.365	0.253	0.347
加工食品の問題	0.112	0.084	0.025	0.083	0.580	0.364
食品や栄養	0.151	0.056	0.045	0.079	0.472	0.257



図2 家庭科の内容についての重点のおきかたに関する因子分析 I

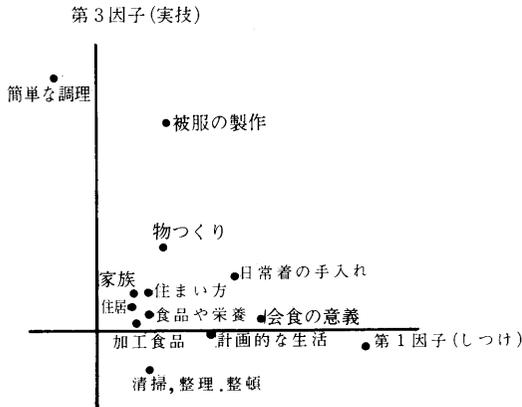


図3 家庭科の内容についての重点のおきかたに関する因子分析II

食事の態度」,「日常着の手入れ」が高い因子負荷量をもっている。どちらかといえば社会生活をおこなう上での基本的な生活態度を重視しており,いわばしつけ(または,マナー,エチケット)を重視するタイプである。家庭科観においても,「日常生活の規律」「礼儀」を重要と考えているタイプである。因子の寄与率は46.7%である。

第2因子は,「住まい方の工夫」,「住居のはたらき」に高い因子負荷量をもち,住居を重視するタイプで,地域的には市街地,年代では30代に多い。

第3因子は,「簡単な調理」,「被服の製作」を重視するいわば実技重視のタイプである。このタイプは,マイナスでしめされた項目が3つで他のタイプより多く,限られた時間のなかでの実習は,かなり規制をうけていることがわかる(因子寄与率14.0%)。

第4因子は,「清掃,整理・整頓」,「家族の仕事や役割の理解」,「生活時間や金銭収支の計画的な生活」を重視する生活管理重視タイプと考えられる。因子の寄与率は10.2%である。

第5因子は,「今日の加工食品の問題」,「食品や栄養についての知識・理解」を重視するどちらかと言うと科学理論重視のタイプである。このタイプは家庭科の学習において,消費者としての知識と態度,生活にかかわる科学の認識を重要だと考えている教師といえる。このタイプでは「被服の製作」が軽視される傾向が認められる(因子寄与率8.5%)。

## まとめ

以上により小学校教師が家庭科を担当する場合,その

指導内容項目への重点のおきかたから,5つのタイプの教師像,すなわちしつけ,住居,実技,生活管理,科学理論を重視する型が導き出されることをしめた。各タイプで授業内容も異なり,それぞれに長所,短所をもった授業が展開されていることが推測される。

従来,家庭科の授業内容については,児童の発達段階に応じた学習内容の選定,児童の環境の実態に応じた題材の設定,他の教科および中学校との関連,教材としての本質性などの観点から論じられることが一般的であった<sup>9)</sup>。今後は,これらに加えて,教師それぞれのタイプの長所をいかし,欠点を補うような教材の取り上げ方,教材の配列,さらには,新しい教材の開発が課題であることをこの結果はしめしていると言えよう。

この調査は文部省の教育方法等改善経費の補助を受けておこなった共同研究の成果の一部である。共同研究は,山口大学教育学部助教授友定啓子氏,助教授高阪謙次氏,助手小川裕子氏,助教授上村元子氏とともにおこなったが,筆者がとりまとめた。とりわけ友定氏とは討論をかきねた。

なお,本研究は,1986年8月23日,日本家庭科教育学会中国地区会第6回研究発表会において発表した。

終わるにあたり,アンケートに協力して下さいました山口県内の小学校教師の方々に深く感謝いたします。

(昭和61年12月6日受理)

## 引用文献

- 1) 五島淑子・友定啓子:小学校教員の児童生活把握状況と家庭科観(第1報),日本家庭科教育学会誌29・3,15~19(1986)
- 2) 友定啓子・五島淑子:小学校教員の児童生活把握状況と家庭科観(第2報),日本家庭科教育学会誌29・3,20~23(1986)
- 3) 貴田康乃・小松宏子:近畿3府県小学校における学級担任の家庭科指導実態(第1報),日本家庭科教育学会誌27・2,27~33(1984)
- 4) 貴田康乃・小松宏子:近畿3府県小学校における学級担任の家庭科指導実態(第2報),日本家庭科教育学会誌27・2,34~40(1984)
- 5) たとえば家庭科教育学研究会:小学校家庭科教育の研究総論編改訂版,学芸図書,pp48~76(1979)

## 参考文献

文部省:小学校指導書家庭科編,東京図書(1979)